

論 文

秘教化したナショナリズム  
— モンゴル人民共和国におけるチンギス・ハーン表象の誕生と挫折、  
秘教化 (1921～1953) —  
Esoteric Nationalism  
— Representations on Chinghis Khan in Early Socialism  
in Mongolia (1921-1953) —

島 村 一 平

(滋賀県立大学人間文化学部)

SHIMAMURA Ippei

(The University of Shiga Prefecture)

キーワード: ナショナリズムの秘教化、出版社会主義、チンギス・ハーン

Keywords: esoteric nationalism, printing socialism, Chinghis Khan

目 次

はじめに

1. チンギス・ハーンの脱神話化と知識人の粛清、あるいはナショナリズム言説の誕生と挫折 (1921年～1940年頃)
  2. ソ連のチンギス言説の翻訳と民族主義的読み替え期、あるいは秘教化するナショナリズム (1941年～1953年)
- おわりに ナショナリズム言説の誕生と挫折、秘教化

はじめに

チンギス・ハーンは、モンゴル人がナショナリズムを構築する上で、最も重要な文化資源 [島村2008] であることは間違いない。モンゴル国に関して従来の説では、チンギスがナショナリズムの資源として利用されるようになったのは、1990年代初頭の社会主義の放棄と民主化が進む過程で始まったと考えられてきた。つまり社会主義時代 (1924年～1992年)、モンゴルでは「民族の英雄」の名を語ることも称えることも許されてこなかったといった解説が繰り返しなされてきた。

そうした中、モンゴル人が自らのチンギス観を肯定的なものに変えることができたのは、グローバルゼーションによってモンゴル人がアメリカやイギリスなどのモンゴル帝国のヨーロッパ遠征と無関係な欧米の国々が描く好意的なチンギス・ハーン観を知ったおかげだとする [Campi2006] という説が登場した。さらには社会主義時代にソ連によるチンギス言説はなかったが、ポスト社会主義時代のモンゴル人がナショナル・アイデンティティを構築する際に、肯定的なチンギス言説の真反対の姿を社会主義時代の記憶や言説に押し付ける必要があったために「神話的歴史 (mythico-history)」を捏造したのだ [Kaplonski2005] という奇説すら登場した。

しかし近代化や印刷出版技術の普及が「社会主義」によってもたらされたのではあるが、モンゴルの知識人たちはソ連を通じてチンギスに関する知識を吸収しながらも、ソ連による否定的な言説の修正のための抵抗を行っていた。読者であるモンゴルの人々は与えられた情報を字面どおりではなく反語的に理解することでナショナリズム意識を形成していった可能性が高い [島村2008 ; Shimamura2012]。さらに筆者はこうしたソ連型社会主義による「出版社会主義」によって、社会主義期中期 (1941-1966) のモンゴルでチンギス・ハーンがいかに表象されていったかを国史編纂事業の背景を検討することで、その実態を明らかにしてきた [島村2017]。

そこで本稿では、ソ連側の介入の無かったナショナリズム言説の誕生期および直接の介入 (著者の粛清の時代 1921年～1940年頃) とソ連によるチンギス言説の翻訳と密かな読み替えを行っていた時期 (1941年～1953年) に焦点を当てて、チンギス表象を事例にいかになショナリズムが誕生し頓挫し、そして秘教化していったかを論じるものとした。なお、ここで言う「秘教化」とは、ナショナリズムに関する知識が知識人のみで共有され、一般大衆には秘された状況のことを言うものとする。

## 1. チンギス・ハーンの脱神話化と知識人の粛清、あるいはナショナリズム言説の誕生と挫折 (1921年～1940年頃)

ナショナリズムは、こうした政治・文化的エリートの知識が一般庶民に普及することによって、初めて生み出されるものである。そもそも20世紀以前のモンゴルの庶民たちは、言語や習慣、共通の先祖を持つものとしての「民族 (nationality)」概念を理解していたとは考えられないだろう [Atwood1994]。事実、1934年にモンゴル初の「歴史書」を執筆したA.アマルは、その著書『モンゴル簡史』の中で、「モンゴル国内外の多くの学者が書いた歴史書は多く存在するが、一冊にまとまった歴史書はいまだ存在していない」「モンゴル民族は、古代より本当に自らの手で歴史を完全に記録するという点で遅れていたのも、いくつかの重要な歴史上の経緯は見捨てられ、忘却にいたった」 [Amar2015 (1934):224] とモンゴル人自身の手による歴史書の不在と歴史の忘却を嘆いている。

モンゴルでは『モンゴル秘史 (元朝秘史)』以降、16世紀末よりチンギスの事績に関して『チャガン・テウケ (白い歴史)』『アルタン・トブチ』『蒙古源流』『アスラクチ史』といった年代記が書かれてきた。 [森川2007]。確かに知的エリートたちは、農耕・都市民同様に膨大な文字資料を残してきた [楊2004] が、その一方でアマルの指摘するとおりの「秘密裡に保管されていた」 [Amar2015 (1934) :224] ので、一般の遊牧民たちには目にすることのできないものだった。

むしろ一般庶民にとってのチンギス・ハーンと言え、口承で伝えられてきた昔話の勇者なのであり、迦楼羅鳥となって敵と戦う魔術的な英雄であったり、老人に変身して弟たちを諭す魔術師であったりといった神話的人物であった [cf. 蓮見1993, 原山1995など]。一方、16世紀末に成立した『チャガン・テウケ』においてチンギスが仏教的な転輪聖王と捉えられるようになって以来、チンギスの仏教的な神格化が進んでいった [Franke1994 (1978) :64-69, Charleux2009:223]。20世紀初頭の内モンゴルのオールドスでは、チンギス・ハーンは仏教の金剛手菩薩 (*Ochirvani*) と同一視されながら祭祀されていた [Nasan Bayar2007]。

しかし近代国家を作り上げようとした時、むしろこうした神話的性格を取り払った「歴史」の構築および「歴史上の人物」としてのチンギス・ハーンの再構築が必要だとされた。とりわけモンゴル人がナショナリズムを形成する際、何よりもチンギス・ハーンをモンゴル人にとっての「共通の始祖」であるとイメージし、さらに「外敵」あるいは「異民族」に勝利したという情報を得ることが必要であろう。しかし当時、おそらくモンゴルの庶民が歴史学的情報およびヨーロッパや中国に関する地誌の情報 (かつて彼らの先祖が征服事業を通して獲得したであろう) に対してナショナリズムを構築するに十分な知識を有していたとは考えがたい<sup>1</sup>。

そうした中、モンゴル人民政府が成立して間もない1921年11月、モンゴル科学アカデミーの前身となる典籍委員会が結成された [モンゴル科学アカデミー 1988 : 434]。この委員会は、満州語や漢語を解するジャミヤン公を委員長、ブリヤート・モンゴルの知識人ツェベーン・ジャムツラノーや中国語・日本語・満州語・チベット語に通じた内モンゴル出身のCh. デムチグドルジ (通称ダンダー)、チベット語に精通した活仏ザワー・ダムディンといった当時最高の知識人たちを集めた。彼らの目的はチベット語の仏典のモンゴル語への翻訳やヨーロッパ諸語で書かれた世界史をモンゴル語へ翻訳、マイマー・ホト (首都フレーの漢人商人居住区) でモンゴル語・満州語の手写本を調査し、可能な限り蒐集することだった [Chuluun2011:31]。

そこでまず外国語で書かれたチンギス関連著作の海外調査や翻訳が始められた。例えばツェベーン・ジャムツラノーは、チンギスの事績を調査するためにヴェルフネ・ウディンスク (現在のウラン・ウデ) やイルクーツク、チタへと出発したし、委員会はロシアの高名なモンゴル学者ウラジーミルツォフに対して、フランス、イギリス、ドイツで出版されたチンギス・ハーンに関する書籍を購入するように依頼した [Tseren1990, Chuluun2011:29]。また1922年にはウラジーミルツォフ著『チンギス・ハーン』の最初の2章<sup>2</sup>や、13世紀のモンゴル帝国を旅したマルコ・ポーロの『東方見聞録』の最初の数章、プラノ・カルピニの『モンゴル人の歴史』などが翻訳された [Boldbaatar&Punsaldulam2009:3, モンゴル科学アカデミー 1988 : 436-437]。また1926年には、モンゴルの歴史学者N. デンデブDendevは、ロシアのウラジーミルツォフとともに『モンゴル秘史』に登場する地名の探索のためにヘンティ県でフィールドワークを行った [Boldbaatar&Punsaldulam2009:34]。

<sup>1</sup> 田中克彦によると、1924年～1928年の人民革命党政府の文部大臣を務めた啓蒙家バトハーンは、1921年に一般庶民向けに『世界地理』や『アジア地理』を書き、出版したが、ゴーリキーと交わした書簡の中で「伝統教育は寺廟の手中にあり、言語教育はチベット語の読み書きのみで現実の動きから遊離した仏教の影響を脱せられない」と嘆いていた [田中1990 (1973) : 134-139]。

<sup>2</sup> モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所史料Φ-3, Д-1, XH-1114

以上のように20世紀初頭のモンゴルで目指されていたのは、仏教色の強い、伝説上の人物であったチンギスをヨーロッパにおける最新の研究成果や外国の史料を手に入れることで脱神話化し、歴史上の人物へと再構成していくことであった。あるいはこうした過程は、「歴史意識のヨーロッパ化と世俗化」[Atwood2004:101] と言ってもいいだろう。

こうして翻訳されたヨーロッパ人によるモンゴル帝国に関する記録やモンゴル史の研究書、中国の史書などを参照しながら書かれたモンゴル最初の「歴史書」が、前述のA.アマルの『モンゴル簡史 (*Mongolyn Tovch Tüükh*)』(1934年)であった。この著書は、近代歴史学的手法で書かれたモンゴル初のチンギス・ハーン伝でもある。

このアマルの『簡史』は、以下の3点において特徴的である。第一に非常に民族主義的な立場から書かれた著作であること。なぜなら、この書物はモンゴル・ナショナリズムを生み出すような、当時の自国民に向けた「啓蒙書」でもあったからだ。したがって社会主義時代の書籍であるにもかかわらず、「封建主義」「生産関係」「階級闘争」「搾取」といった社会主義の用語が一切使用されていない<sup>3</sup>。

また本書は、匈奴から始まりチンギスのモンゴル帝国に至るまでの通史であるが、匈奴に関しては、モンゴル人の先祖であると比定した上で匈奴人が漢人とは起源を異にすることを主張している [Amar2015 (1934) :227-228]。つまり彼らの非中国系出自が、彼らのアイデンティティとして語られているのである。

同書の民族主義的な立場は、序文において「モンゴル民族 (*Mongol Undesten*) は、何千年も前の古代よりアジア大陸の中で威容を放ってきたのであり、特にチンギス・ハーンの時代は、アジア大陸とヨーロッパ大陸の人々を攻略し、驚異的な功績を築いた歴史を持っている」[Amar2015 (1934):223] と明確に宣言されている。また「モンゴルの全人民は自国・自民族の歴史と国土の重要性を認識するならば、全てのモンゴル人が国家や同根の民族 (*undes ugsaa*)、国土を守る心を持つようになるであろう」[Amar2015 (1934):223] とも謳われている。

第二に本書の大部分はチンギス・ハーンの伝記であり、それを構成するために『モンゴル秘史 (元朝秘史)』が史料として利用されているということ。『簡史』は、記述の半分以上がチンギス・ハーンの事績に関する記述となっており、全10章で構成されている。9章が『モンゴル秘史』に基づいたチンギスの始祖神話の紹介で、10章が「チンギス・ハーンの時代」という章題のもと全体の約四割の紙幅が割かれている。実は、チンギスの幼少期・青年期に関する史料は乏しく、『モンゴル秘史』の情報に頼らざるを得ない。

20世紀前半、ボズネーエフやコージン、ヘーニッシュ、ペリオといったロシアやヨーロッパの学者たちは、『秘史』を史実ではなく空想の混じった「古典文学」と捉えて文学や言語学の範疇で研究を進めた<sup>4</sup>。これに対して、当時例外的に『秘史』を「史料」として扱ったのは、モンゴルに同情的な

<sup>3</sup> マルクス・レーニン主義思想の主要な著作の翻訳・出版は、アマルの『簡史』が出版する9年前の1925年からすでに始まっていた。例えば1925年に『共産党宣言』、1928年には『家族、私有財産、国家の起源』、1931年にはレーニンの『社会主義と宗教』『社会主義と無政府主義』が翻訳された [モンゴル科学アカデミー (編) 1988:433]。このことを考えると、アマルはこれらを読んでいた可能性は非常に高い。また興味深いことに、この事実から1924年に成立したモンゴル人民共和国は社会主義理念の理解より国家建設が先行していたことが了解できる。

<sup>4</sup> 一方、日本において明治40年 (1908)、初の『秘史』を訳出した那珂通世は『聖武親征録』や『集史』といった

ロシアにおけるモンゴル学の泰斗、ボリス・ウラジーミルツォフであった。彼は『秘史』について「ラシッド・ア・ゼンによる史料其他の文獻と合致せぬものがあつても（中略）『勇健なる叙事詩』ではなくして、「ステップの匂」に満され叙事詩的文體に記された歴史＝年代記と特徴づけし得るのである〔ママ〕」と評価している〔ウラヂミルツォフ1941(1934):15-18〕<sup>5</sup>。また、前述のとおり、1924年にウラジーミルツォフの『チンギス・ハーン』の一部がモンゴル語に翻訳されており<sup>6</sup>、そこにおいても『集史』と並ぶ重要な史料として『秘史』を扱った上で、少年時代のテムジンを描きだしている〔ウラヂミルツォフ1941(1934):3, Vladimirtsov2002(1922):15〕。アマルが『秘史』を史料として使ったのは、おそらくウラジーミルツォフのやり方を見習ったからだろう。

最後に『簡史』の第三の特徴として、チンギスに関してヨーロッパの研究者の言説を引用しながら肯定的な評価を与えているということが挙げられる。例えば、同書ではチンギスの人格を「草原の遊牧部族の野蛮な家庭に生まれ、幼少時に窮乏生活を送ったり他者に捕縛されたりするなど苦難を味わったが、賢母の教育によって品行方正に育ったのであり、（中略）」〔Amar2015(1934):315〕「チンギス・ハーンは、満洲人やヨーロッパの王侯貴族のように尊大にふるまわない、率直で誠実な人」〔Amar2015(1934):318〕と評価している。

またチンギスが行った残虐な殺戮について「清朝の康熙帝や乾隆帝もモンゴルのドゥルベト人やオイラト人を何万人も虐殺したことを考えれば、チンギスが取り立てて残虐だと記述する理由はない」とした上で「歴史家の中にはチンギス・ハーンの事績や歴史を記述する際、極端に中傷して書く者もいるが、（中略）、こうした中傷についてグルム・グルジマイロは証拠を示して以下のように反論している」〔Amar2015(1934):316〕といったようにチンギスに対して肯定的なポーランド人学者グルジマイロを引用することで巧みに反駁している。同様にチンギス・ハーンが戦争に明け暮れていただけでなく、後継者に寛容な性格のオゴデイを指名するなど常に残虐ではないこと、そのオゴデイも耶律楚材の意見を取り入れ文化的かつ寛容に帝国を統治したことなどをロシア人学者ウラジーミルツォフの言葉を引用しながら論じた〔Amar2015(1934):318〕。

そうした上で「チンギス・ハーンは東アジアの中でモンゴル系民族 (*Mongol Ugsaatan*) とモンゴル国を統一し、一つの大国家を樹立したほか、（中略）このようにアジアやヨーロッパの国々に跨って大帝国を建設した。（中略）（チンギスは）アジア大陸やヨーロッパ大陸の人々の間の往来を作り出した人であるといえよう」〔Amar2015(1934):324〕と結論づけている<sup>7</sup>。

ちなみにアマルの『モンゴル簡史』が出版される数年前、20世紀初のチンギス・ハーンを題材に

史料との矛盾を指摘しつつも、史料として扱ったが、後に小林高四郎は「蒙古文学史上の傑作」だとした〔小林1954〕。また村上正二は、「モンゴルの古事記」と呼んでいる〔村上1970:2〕。

<sup>5</sup> ロシア語原典は、2002年のウラジーミルツォフ全集を参照のこと〔Vladimirtsov, 2002:304-305〕。

<sup>6</sup> モンゴル科学アカデミー歴史学研究所保管の翻訳原稿Ф-3,Д-1, ХН-1114には、手書きで1922年と書かれており、同研究書の史料カタログ〔Chuluun (ed.) 2010:254〕においても1922年と記録されている。しかし原著の発表年が1922年であることを考えると、その年に翻訳された可能性は低い。ちなみに日本語訳〔ウラヂミルツォフ(小林高四郎訳) 1934〕は1930年の英訳からの重訳。

<sup>7</sup> 実は同書出版の5年前(1929年)から、モンゴルでは強制的な集団化によって財産を没収された旧封建領主や仏教ラマ、牧民たちの反乱が相次いでいた。その結果1932年5月、行き過ぎた左翼的政策を批判されるようになった。民族主義的な同書が出版できたのは、この左翼偏向批判の間隙を縫ったからかもしれない〔cf. モンゴル科学アカデミー 1988:305～317〕。

した文学作品が書かれている。劇作家・詩人のS.ボヤンネメフ（1902-1937）の『勇敢な子テムジン（*bayatur köbegün Temüjin*）』（1929）である。『勇敢な子テムジン』は、ボヤンネメフも書き残しているように『モンゴル秘史』を原作とし、幼少時テムジンと呼ばれたチンギスが艱難辛苦を乗り越えていく様を描いた作品である〔Buyanemekh1929〕。ところが不思議なことにこの作品は、原作には見られない仏教的な要素がいくつかの場面でみられる。

例えば、テムジンが父エスゲイに連れられてフンギラト族の族長デイ・セチェンに嫁取りに行く場面で「昨夜、天空から一人の雄々しき転生者（*khuvilgaan khun*）が右手に太陽、左手に月を持って飛んできて我がゲルに入り、私の膝に座る夢をみたのだ」とデイ・セチェンが語っている〔D.Tsedev, Ban Manduga (eds.) 2012-2015:417〕。この転生者という語、本来の『モンゴル秘史』では白鷹である〔村上（訳註）1970:87〕。

またタイチウド族に捕らわれたテムジンが脱出し、ソルカン・シラ老人の機知で救われるシーンでも転生者とも活仏ともとれる語が登場している。老人はチンギスを探しに来た敵の戦士をうまく追い返した後、「かなり恐れおののいていたが、祈祷をささげ、『何かに護られた活仏（*yamar sakhiulsan khuvilgaan*）が救ってくれたのだろうか？』、と言いながら震えた」とある〔D.Tsedev, Ban Manduga (eds.) 2012-2015:417〕が、『秘史』にこのようなセリフは存在しない。ボヤンネメフの仕事は、一種のチンギス・ハーン像の再仏教化だと言えるかもしれない。

また彼の戯曲「モンゴルを囲む侵略国家間の状況を簡略に示した歴史」（1923年）では、モンゴル人は再び眠り込んではず、自由と独立を護るために、文明を学び、歴史の教訓に学びつつ、ロシアの共産党の助けで内外の敵を滅ぼし、最後の勝利を得なければならないという内容が書かれている。その第一章においてチンギス・ハーンは、はっきりと称賛されている〔王満特嘎2004:34-35〕。

以上、20世紀初頭、モンゴルが近代国家を築いてから最初に書かれた歴史書と文学における「チンギス・ハーン」の表象内容および成立の背景を吟味してきた。そこから見えてきたのは、社会主義的ドグマは片鱗も見いだせないし、ソ連によるチンギス言説への介入も見られないということだった。むしろ当時のモンゴル人エリートたちは、ある意味、主体的にナショナリズム言説を構築していたといえよう。

しかし忘れられていたチンギスを思い出したアマルとボヤンネメフは、揃って「反革命」「民族主義者」だと批判され処刑されてしまう。アマルが『簡史』発表してから3年後の1937年、ソ連の“内務省”とそれに付き従うチョイバルサン内相の企図した粛清の嵐が吹き荒れる。当時首相だったゲンデンはソ連滞在中に銃殺刑となり、デミド將軍もモスクワ行き列車の中で変死を遂げた。

そうした中、1939年3月27日、モンゴル人民革命党中央委員会幹部会において、アマルは突然「反革命」「パンモンゴリスト」「日本のスパイ」だと批判され、そのまま会議中に逮捕される。アマルがチンギスを褒めたたえたことも、同僚のロソルによって強く批判された。この粛清劇の陰で糸を引いていたのは、民族主義者アマルを嫌ったスターリンであったとも言われる。そして彼はソ連に移送されソ連の法律によってモスクワで処刑されたのだった〔Boldbaatar2016:89-95〕。

ボヤンネメフも1937年、ゲンデン・デミドの反革命一味だとされて逮捕され、同年10月25日、銃殺刑に処せられた。1968年に出版された『現代モンゴル文学簡史』では、「草原の指導者であったテムジンが人民の利益ではなく支配階級の利益を一貫して代表していたことに注目していなかったの

である、テムジンの役を理想的な存在として描いたのは、革命の趣旨に沿っていなかったのは当然であろう」[Khorloo, Luvsanvandan, Mönkh, Tsend1968:196]と、あたかも彼をある意味、時代の犠牲者とも読み取れるような緩い批判をしている。

一方、ソ連側は、G.I. ミハイロフによる『現代モンゴル文学史』において、ボヤンネメフを Sh. アヨーシ、M. ヤダムスレンといった同時代の文学者とともに、ブルジョア民族主義者、人民の敵、反革命と攻撃し、その作品を完全に黙殺し歴史的意義を否定した [王満特嘎2004: 26]。こうして20世紀前半にチンギスを語った代表的な人物は、チンギス語り自体が直接の原因ではないにせよ、結果的にどちらも殺されたのだった。

## 2. ソ連のチンギス言説の翻訳と民族主義的読み替え期、あるいは秘教化するナショナリズム (1941年～1953年)

A. アマルの粛清の後、1940年代に入ると、モンゴル人によるチンギス表象は影を潜め、その代わりにロシア人の書いたものの翻訳が主流となっていく。ところがモンゴルの知識人たちは、そうした介入に対して敢えて誤訳することで、その教条的内容を換骨奪胎していった。こうしたソ連のロシア人が書いた作品に対するモンゴル知識人によるチンギス表象の読み替え実践も「ナショナリズムの秘教化」戦術の一つだと言っていいだろう。

1941年2月、ソ連のN.N. ポズニャコフの『チンギス・ハーン時代のモンゴル帝国 (*Chinggis Qaghanu üi-e-yin Monggol güren*)』[Pozdnyakov1941]が、モンゴル語で出版される。翻訳者はかのTs. ダムディンスレン (1908-1986) である。この書物は『簡史』以来、久しぶりに出版されたチンギス・ハーンにかかる総合的な歴史研究書である。ロシア語版の原著は175頁ある<sup>8</sup>が、ダムディンスレンの翻訳は本文54頁とかなり短くなっていることから、かなり端折った要約版であることが窺われる。

ダムディンスレン訳のモンゴル語版は、裏表紙に「母国の歴史を学ぶ手助けに」とロシア語で書かれている。さらに1941年当時、人口約74万人 [National Statistical Office of Mongolia2003:78] のモンゴル人民共和国において5000部という大部数が発行されていることなどから、アマル『簡史』に代わる「国史」に相当するものとして出版されたに違いない。ところがこの本は原著と訳書の間では、長さのみならず、その内容においてもかなりの隔りがある。

例えば、ポズニャコフの原著は内容的に社会主義ドグマが色濃く反映されたチンギス伝となっている。一例を出すと、若きテムジンが「ヌフル (*nökür*) 」と呼ばれる僚友を募ってモンゴルを統一していったことに対して以下のように論じている。

ヌフル<sup>9</sup>というのは、何よりも戦争を行う上で基盤となる力である。というもこのヌフルに支えられながら、草原の富裕な者たちは自分たちのために牧畜民大衆を労働させるよう服従せしめたり、

<sup>8</sup> モンゴル科学アカデミー歴史学研究所アーカイブスФ-5, Д-1, XH-17

<sup>9</sup> 本来、モンゴル語でこの語は、仲間、同志を意味する。不思議と社会主義時代、ソ連で使われた「同志 tovarish」をモンゴル人は、ヌヘルの現代語発音であるヌフル (*Nökhör*) と翻訳した。これも密な抵抗なのだろうか。

一定の義務を押し付けたりすることが可能となったのである。ヌフルに支えられてモンゴルのノヨン（貴族）は、徐々に封建的な搾取制度を築いていった<sup>10</sup>

またモンゴルに対して好意的でチンギス・ハーンに対しても比較的客観的に評価したとされるウラジーミルツォフやゲルム・ゲルジマイロを引用しながら、チンギスを批判する。例えば、以下のようなチンギス時代の「封建的搾取」批判である。

13世紀における、このような義務についてV.Ya.ウラジーミルツォフは「少数の食肉用の家畜を提供することや一定数の搾乳用の家畜、特に雌馬を封建領主の本営へ送り届けること。これによって本営はそのミルクを使用することが可能となった」と表現した。当時、“奴隷”がモンゴル社会における産業と社会関係においてかなりの役割を果たしていたのである<sup>11</sup>。

当時の「税」に関するウラジーミルツォフの機能論的説明を「奴隷」と結びつけるのも驚きであるが、チンギスに対するネガティブキャンペーンのためにアマルが使ったウラジーミルツォフをあえて引用しているところが興味深い。またチンギス・ハーンの人格に関して、感情的な批判が入ったのもこの書籍からである。例えば、「尊大な人物」「抜け目のない」といったネガティブな性格描写であり、「襲撃をやったのける」といった強奪者イメージの演出である<sup>12</sup>。

ところがダムディンスレン版には、以上に示した記述は一切削除されている。社会主義に関する用語に関しても、マルクスへの言及が最後にあり[Pozdnyakov1941:46]、「封建主義」という言葉が途中2回使用されているくらいで、むしろ従来とあまり変わらない「チンギス史」となっている。例えば「封建主義」が言及された箇所を読んでも、以下のように後進性を意味するものとしての記述部分のみでチンギスが搾取者であることを説明する「封建主義的搾取」という用語は使われていない[Pozdnyakov1941:20]。

古代のモンゴル氏族は、13世紀には、旧来の氏族の遅れた社会組織から発展し一歩進んで封建主義の特徴がみられるようになった。しかし当時のモンゴル人が封建的な組織に完全に移行したと考えるのは誤解である。新しい生産力とそれを取り巻く生産関係は、古い社会組織を基礎として成立したのだ。遊牧封建主義 *negüdel-ün fēodalism*（このような封建主義の関係をB.Ya.ウラジーミルツォフ博士が命名した）の氏族組織が永続化して残っていたのであり（後略）

原書と翻訳書の間になぜ、このようなズレが起こっているのだろうか。ダムディンスレンは、1933年～1938年にかけてレニングラード東洋大学で学んでいる。そんな彼が原著を理解していなかったとは考え難い。ただし彼はソ連より帰国直後の1938年11月、内務省によって逮捕され「反革命」の容疑で1年ほど入牢している。

<sup>10</sup> モンゴル科学アカデミー歴史学研究所アーカイブスФ-5, Д-1, ХН-17, p.6.

<sup>11</sup> モンゴル科学アカデミー歴史学研究所アーカイブスФ-5, Д-1, ХН-17, p.7.

<sup>12</sup> モンゴル科学アカデミー歴史学研究所アーカイブスФ-5, Д-1, ХН-17, p.12.

ボズニャコフの著書が出版されて間もない1941年3月、モンゴルの活字世界は大きな転機を迎える。人民革命党中央委員会と閣僚審議会合同会議第22/18号決議で、モンゴル語をキリル文字化することが決定されたのである。そして翌1942年1月には、上述のダムディンスレンが定めたキリル文字の正書法が出版された。さらに1945年にはすべての出版と国家公務を1946年1月より新文字(キリル文字)にする決定がなされたのだった[荒井2006年:185~186]。

13世紀から使用されてきたウィグル式モンゴル文字の使用を辞めてキリル文字化するということは、モンゴル人民共和国にとって古典が読めなくなることを意味する。今まで典籍委員会が翻訳・出版をしてきたチンギス・ハーンやモンゴル史に関する文献も読めなくなる。すなわち、この政策の肝は、モンゴル文字を使い続けている内モンゴル地域とモンゴル人民共和国(旧外モンゴル)との間における情報の遮断である。もう一つ重要なのは、キリル文字化は、リテラシーのリセットもつとえばモンゴル国内で形成されつつあったナショナリズムのリセットだったといえよう。そして学者の中でこのキリル文字化に最も積極的だったのが、ダムディンスレンだった。

その一方で彼は、1947年、モンゴル人民共和国で初めて『モンゴル秘史(元朝秘史)』をキリル式モンゴル語で口語訳して出版している。彼は前文に以下のように記している。

700年前のモンゴルは、現代モンゴル語とはかなり異なっているので、(元朝秘史を)モンゴル旧字で出版するならば、ほんのわずかの知識人が読むだけで、一般人民の理解できないものとなろう。そういうわけで知識人向けのモンゴル秘史原典を出版するよりも前に多くの興味を持っている読者に本書を紹介するという目的で、語義や表現的特徴を喪失せぬように心がけて訳出し、出版したのである [Damdinsüren1957(1947):16]。

ちなみに識字者数は、1926年の1万人(総人口68.4万人)から1935年には7万人(総人口73.8万人)、1940年には12.7万人(総人口73.9万人)に増えている [モンゴル科学アカデミー 1988 : 429]。これらは、キリル文字ではなくモンゴル文字による識字者であると考えていいだろう。ところがキリル文字化以降、識字率は飛躍的に伸びている。1956年には49.3万人(識字率72%)、1969年には72万人(82%)となっている [Zagdsüren, Tsend (eds.) 1967 : 26]。この読者人口の増加に伴い、ダムディンスレン翻訳の『秘史』は社会主義時代に第四版を重ねるベストセラーとなった。

ダムディンスレンの言説はアンビバレントである。社会主義思想を支持しながらも民族主義的とも思われる言説を展開していくのである。例えば、同著の序文では「(モンゴル秘史は)、モンゴル史における比類なき史料であるほか、モンゴル民衆の知的能力を証明した驚異的な文学作品なのである」 [Damdinsüren1990(1947):9] 「新しいモンゴルの革命文化を建設するためにモンゴル民衆が何百年もかけて書き続けてきた文化遺産を自分のものとしないうでどうしようというのだ」 [Damdinsüren1990(1947):11] といったよう相反する語りが見られるのである。また『モンゴル秘史』のチンギス・ハーンの叙述については、「チンギスを中心にした国家形成やモンゴル民族を統一、統治する事績を称賛しただけでなく、チンギスの気性が荒く恥知らずな (*dogshin burangui*) 側面も隠していない」 [Damdinsüren1990(1947):10] と冷静に分析している。

翻訳文化であるにせよ、こうした民族主義言説がある程度可能であった背景として、当時のスター

リンの民族政策が考え得る。ソ連の公式イデオロギーの建前は一貫して国際主義であったが、スターリン指導の第二次大戦期には、国家防衛の必要性からソヴィエト愛国主義や諸民族の土着性が重視されるようになっていた [塩川2004:61-69]。ソ連の「衛星国」であったモンゴル人民共和国においてこうしたソ連の民族政策の影響が及んでいたのは想像に難くない。

事実1941年11月すなわちナチスドイツによるソ連侵攻の5か月後、モンゴルは党中央委員会総会において戦時体制への移行を宣言し、モンゴル作家委員会 (*uran saikhny khüreeleen*) に対しても国家防衛的観点から愛国主義的な内容の演劇や詩を書き、祖国のために戦う英雄主義的な文学作品を発表して大衆を鼓舞するべきだとの決議を採択している [Zagdsüren, Tsend (eds.) 1967:26]。しかし戦後期になると、ソ連では冷戦開始と平行して非ロシア諸民族のナショナリズムに対する引き締め政策がとられるようになった [塩川2004: 69]。

モンゴルにおいても1949年、ナショナリズムに対する引き締めが始まる。1948年末、教育省の支援の下で後に「モンゴル初の教科書」と呼ばれる『人民読本 (*Ardyn Unshikh Bichig*)』 [Jamsranjav, 1948] が出版されたが、明らかにチンギス・ハーンの事績を称賛していた。翌1949年3月、期を待たず独裁者チョイバルサンに次ぐNo2で党書記長を務めていたツェデンバル (当時35歳) が『人民読本』の「誤り」を党中央委員会に報告する。その結果、同年7月21日、『人民読本』を厳しく糾弾する決議がモンゴル人民革命党中央委員会政治局会議においてなされた (34/64号決議)。

「本書の中にモンゴルの封建主義について記述された部分にチンギス・ハーンの強盗遠征 (*diirmiin ayan dain*) において階級論的評価をせぬどころか、その事績を称賛さえしている。こうした行為は、わが国の知識人の一部の遅れた者たちが排他的な民族主義 (*ündesnii yavtsuu üzel*) にはまりこんでしまっていることを如実に示すものである<sup>13)</sup>

この会議の結果、『人民読本』の回収・廃棄のみならず、著者のジャムスランジャブおよび編集部員の解雇と準党員への降格、教育大臣チョイジャムツの譴責処分などが決定された。さらに教科書の出版が今後、党中央委員会の監視下に置かれ、排外的民族主義に対する闘争を強化しプロレタリアート国際主義教育を推進していくことが確認された<sup>14)</sup>。

このような人民革命党によるナショナリズムの締め付けによって、モンゴルの知識人たちは怯んだかといえ、そうとも言い切れない。ツェデンバルによる『人民読本』批判の後の1950年と1951年、矢継ぎ早にチンギス・ハーンに関する翻訳書が出版される。それはソ連の作家、ワシリー・ヤン (*Vasily Yan*, 本名 *Vasily G Yanchevetsky*) による歴史『チンギス・ハーン (*Chingis khaan*)』および『バト・ハーン (*Bat khaan*)』である。

ヤンの原作 *Chingis khaan* (チンギス・ハン) (1939年) *Baty* (バトゥ)<sup>15)</sup> (1941年) は、1955年に発表された *K Poslednemu Moriu* (最後の海へ) とともに、後にソ連において『モンゴルの侵略三部作 (*Istoricheskaya Trilogiya Nashestvie Mongolov*)』と呼ばれることになる。その第一作目である『チンギ

13 モンゴル国立公文書館史料 УТА УТНОНББА Х-4, Д-16, Хн-5, р.13.

14 モンゴル国立公文書館史料 УТА УТНОНББА Х-4, Д-16, Хн-5, р.16

15 原作名は *Baty* であるが、モンゴル語には *Bat khaan* と翻訳されている。

ス・ハーン』は、ノーヴィーミール誌に発表されやいなや大反響を呼び、1942年スターリン賞を受賞するにいたった。この作品は、チンギスによって侵略されたホラズム・シャー朝の“巡礼者”ラヒムの視点から描かれた歴史小説である。

本書は、2部9章とエピソードで構成され、第一部では、没落の予感のするホラズム・シャー朝の姿を描くことから始まり、モンゴル軍の攻撃によるブハラ陥落までが描かれる。第二部は、モンゴル軍の侵攻によって灰燼に帰すブハラとサマルカンドが描かれたのち、虐殺と略奪の惨状とホラズム皇子ジェラル・エツ・ディーン (ジャラルッディーン)<sup>16</sup>の抵抗と王朝の最後が描かれる。[Yan (Rinchin et al.tr.) 1950 (1939)]<sup>17</sup>。その中でチンギスは死の直前に中国の道士、長春 (真人) を呼び寄せ不老不死の薬を求めるなど、生への執着が強かった人間として描かれている<sup>18</sup>。

不思議なことに本書の翻訳には、民族主義者として知られる文学者・言語学者リンチェンが編集代表となり、前述のダムディンスレンはもちろんのこと、当時のモンゴル科学アカデミーの人文科学系の錚々たる面々 (10名) が参加している。そして誰がどの章を担当したのかは記されていない。さらに異様なのは、1950年当時人口75.8万人 [National Statistical Office of Mongolia2003 :78] のモンゴルにおいて1万部発行されているという点である。

チンギスに関して、ネガティブな表象をしている本書をなぜ当時のモンゴル人の学者たちは大量に発行したのか。おそらく、モンゴルの一般市民は、この書によってチンギス・ハーンが中央アジアヤルーシ (現在のロシア) といった地域を征服したという事実を知ることができたからではないだろうか。事実、1942年生まれで文学者D教授は、地方の出身であるが、子供の時にヤンの小説を通して、初めてチンギスに関する知識を得たのだと語ってくれた。そのとき、「チンギスは外国をひどい目にあわせた、悪い奴だったのかと知り、ショックだった」と語ってくれた。またその次に読んだのはダムディンスレンの『モンゴル秘史』であったが、『秘史』を読んでチンギスに対する印象はだいぶよくなったのだという。

『モンゴル秘史』は、チンギスの一代記ではあるが、そのほとんどがモンゴル統一までの物語である。しかも外国への遠征部分は、アトゥッドも指摘しているように地理的情報もあいまいで不正確である。

ところが、本書は現在の地名であるサマルカンド、ブハラ、キエフといったチンギス軍が征服した地と人々が近代歴史学と地理学に裏付けられた情報を使いながら描かれているのである。当時のモンゴル人に対して指導的立場にある、あるいは抑圧的な「ロシア人の兄たち」を粉砕したチンギス軍の姿は、モンゴル人の読者の中でも訳者たちの「真意」をわかる人々にとっては、さぞかし痛快であったに違いない。例え「野蛮」で「見すばらしい姿」をしていて「文盲」だと描かれようと、そこは少し我慢すればいい。

奇妙なことに、本書の本文が終わった後、数行の「あとがき」とも思われるメモが改行されずに書

<sup>16</sup> ヤン著『チンギス・ハーン』のモンゴル語版に基づき人名をカタカナ表記したが、( )の中に日本での一般的な表記を示した。

<sup>17</sup> 1944年に日本語訳もなされている [ヤン (奥澤訳) 1944 (1934)]。

<sup>18</sup> 奥澤の日本語訳では、長春真人や耶律楚材といった人物の名前が、それぞれチャン=チューニ、エリユ=チュ=ツァイと、ロシア語からのカタカナ転写のままで残されている。

かれている。そこには「(訳者たちが) 訳したものをダムディンスレンが1944年6月10～20日に訂正し、その後全員で1949年7月5日～8月31日までロシア語の原著と突き合わせて直したこと」そして「1950年5月にタイピストが打ったものをリンチェンが3回目の校正をしたこと」[Yan (Rinchin et al.tr.) 1950 (1939) : 316]。という細かな校正日程のみが記されている。

ここから読み取れるのは、第一に本書は第二次大戦中に荒訳が完了していたこと、すなわちソ連やモンゴル人民共和国において愛国主義≒民族主義に対して寛容だった時代に取り組まれた仕事であったということである。第二に、とはいえ気になるのは訳者らが第二校に取り組んでいた1949年7月は、ツェデンバル書記長による『人民読本』批判が行われていた時期でもあった。このときあえて「全員で」作業をしていたことを書き残したのは、書記長ツェデンバルに対する密やかな抵抗であったと考えられないだろうか。スターリン賞を受賞したこの書の翻訳を発禁にすることは、さすがのチョイバルサン首相やツェデンバル書記長にもできなかったことであろう。

後に文学者のL.トゥデウは、この翻訳について「日本の帝国主義の犬の鎖がガチャガチャと音を鳴らしていた状況下で国家の独立を強固にし、自由のための闘いや愛国主義の思想は何よりも重要であった。(中略)しかし当時、わが国の作家たちがヤン著『チンギス・ハーン』や『バト・ハーン』などの小説を翻訳したのは偶然の出来事ではないだろう」[Tüdev1971]と意味深長なコメントを残している。この翻訳、おそらく「偶然」ではなく、ツェデンバルの人民読本批判に対する「必然」的反應／抵抗だったのではないだろうか。

以上のように40年代～50年代にかけて、モンゴルにおいてチンギス・ハーンを巡る表象はソ連のロシア人の著作を巧みに「翻訳」することで、否定的言説を換骨奪胎したり秘密の読み替えがなされたりしていたということがうかがわれる。しかしこうした「抵抗」がどこまでナショナリズムの形成に功を奏していたのかは疑わしい。とりわけヤンの著作は民主化直後の混乱期に、マルクスやレーニンの著作同様、「不要物」だとされ、市場でトイレット・ペーパー用の紙としてグラム売りされて消費されていった。おそらくリンチェンらの「秘密の意図」は一般大衆には気づかれなかったのではないだろうか。

1952年、モンゴルの独裁者チョイバルサンがモスクワで客死し、その翌年スターリンも他界する。そうした中、モンゴルにおけるチンギス・ハーン表象の表舞台は、『モンゴル人民共和国史』つまり国史の編纂へと移っていく。社会主義期における国史編纂事業は、モンゴル科学委員会とソ連科学アカデミーの「共同作業」——事実上のソ連によるモンゴル人民共和国に対する歴史言説への直接介入であった。

## おわりに ナショナリズム言説の誕生と挫折、秘教化

本稿では、社会主義時代とりわけ前期(1921年～53年)のモンゴル国におけるチンギス・ハーン表象とその表象に至るまでの過程を含めて検討することで、ナショナリズム形成過程を検討してきた。

第一段階は、近代歴史意識の誕生によるチンギスの脱神話化の時代(1921年～1940年頃)である。

近代以前、仏教の守護尊や昔話の英雄といった神話的存在であったチンギス・ハーンは、ソ連や欧州における近代的な歴史学が導入された結果、その「脱神話化」がなされ、歴史上の人物へと再構成されていった。こうして出来上がったモンゴル初の近代的な歴史書がA.アマルの『モンゴル簡史』であった。しかしこうしたローカルなナショナリズム言説は、著者が処刑され、書物は発禁となるという「間接的な」言説介入を受ける。その結果、モンゴルのナショナリズムは死産したといえよう。

第二段階は、ソ連のチンギス言説の翻訳と民族主義的読み替え期 (1941年～1953年) である。

1940年代に入ると、モンゴル人によるチンギス表象は影を潜め、その代わりにロシア人の書いたものの翻訳が主流となっていく。ソ連の学者や作家によるチンギスの「悪魔化」ともいえる言説に対して、モンゴルの知識人たちはその教条的内容の換骨奪胎を企図したようである。こうした密かな知識人たちの抵抗を本稿ではナショナリズムの「秘教化」と呼んだ。

また1941年には、モンゴル文字からキリル文字へと正書法が変えられることでリテラシーのリセットが行われた。したがってアマルやボヤンネメフの著作が一般大衆に広く読まれることはなかった可能性が高い。キリル文字化は、ナショナリズムのリセットでもあったのである。

これに対してダムディンスレンは、キリル文字で前書きに社会主義イデオロギーによる評価を加えた上で『モンゴル秘史』を出版するといった、チンギスにかかる知識の普及戦術をとった。ヤンの『チンギス・ハン』『バトゥ』の翻訳作業自体もモンゴル知識人たちによるある種の抵抗の可能性が強い。こうした『モンゴル秘史』は、社会主義時代を経て、重版され、チンギスの知識は徐々に一般大衆に普及しはじめた。チンギスのネガティブな側面を強調したロシアの作家、ヤンの作品も地方の図書館にまで配布されたことで広く知られることとなったのである。

本稿が論じたのは、この第二段階までである。第三段階は、ソ連主導の国史編纂事業とモンゴル知識人の戦術 (1954年～1966年) の時代である。ソ連は『モンゴル人民共和国史』編纂事業を通して、直接的な言説介入、すなわちロシア語で執筆したものをモンゴル語に翻訳するという形でモンゴル『国史』編纂に介入したのだった [島村2017]。

最後に紹介しておきたいのは、社会主義崩壊後の2002年に出版された『モンゴル国史』第二巻の序章には「共産主義体制と厳しい思想統制下にあった頃でも、当時の歴史学者たちは、チンギス・ハーン<sup>1</sup>の地位を可能な限り正しく評価し、その時代の歴史を現実のものとして評価する隠れた目的 (*echnee zorilgo*) をもっていた」(傍点は筆者) [Ishidorj2002: 23] と記されていたという事実である。本論で示した「ナショナリズムの秘教化」は、あながち現地の知識人と認識を異にするものではないといえないだろうか。

## 〔引用文献〕

### 〈日本語文献〉

荒井幸康 2006『言語の統合と分離：1920-1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』東京：三元社

アンダーソン、ベネディクト (白石隆・白石さや訳) 1987 (1983)『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』東京：リプロポート

- ウラヂミルツォフ、ペ、ヤ (外務省調査部訳) 1941 (1934) 『蒙古社会制度史』東京：生活社
- ウラヂミルツォフ (小林高四郎訳) 1934 『チンギス・ハーン傳』東京：日本公論社
- 岡洋樹 2007 『清代モンゴル盟旗制度の研究』東京：東方書店
- 小林高四郎 1954 『元朝秘史の研究』東京：日本学術振興会
- 塩川伸明 2004 『多民族国家ソ連の興亡 I 民族と言語』東京：岩波書店
- 塩川伸明 1993 『終焉の中のソ連史』東京：朝日新聞社
- 島村一平 2008 「文化資源として利用されるチンギス・ハーン：モンゴル、日本、ロシア、中国の比較から」滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』24：7-34
- 2014 「社会主義が生み出した「民族の英雄」—チンギス・ハーン」小長谷有紀・前川愛編『現代モンゴルを知るための50章』東京：明石書店、pp.35-40
- 2017 「社会主義が/で生み出した英雄・チンギス・ハーン—モンゴル人民共和国におけるチンギス表象とナショナリズム形成にかかる一試論(1941～1966)」、『歴史学研究』、7月号(第959号)：36-50
- 橋 誠 2011 『ボグド・ハーン政権の研究—モンゴル建国史序説1911-1921』東京：風間書房
- 田中克彦 1990 (1973) 『草原の革命家たち—モンゴル独立への道』東京：中央公論社
- 中見立夫、濱田正美、小松久男「革命と民族」小松久男編 2000 『中央ユーラシア史』東京：山川出版社、pp.342-413。
- 蓮見治雄 1993 『チンギス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸』東京：角川書店
- 原山煌 1995 『モンゴルの神話・伝説』東京：東方書店
- 森川哲雄 2007 『モンゴル年代記』東京：白帝社
- モンゴル科学アカデミー (二木博史・今泉博・岡田和行訳・田中克彦監修) 1988 『モンゴル史1』東京：恒文社
- 村上正二 (訳註) 1970 『モンゴル秘史1—チンギス・カン物語』東京：平凡社
- 村上正二 1970 「はしがき」村上正二 (訳註) 『モンゴル秘史1—チンギス・カン物語』東京：平凡社、pp1-7。
- 楊海英 2004 『モンゴル草原の文人たち：手写本が語る民族誌』東京：平凡社
- ヤン、ヴェー (奥澤三郎訳) 1944 (1934) 『小説 チンギス汗』東京：鮎書房。
- 王満特嘎 (WANG Mandu-ya) (岡洋樹訳) 2004 「新発見のS. ボヤンネメフ作戯曲『モンゴルを囲む侵略国家間の状況を簡略に示した歴史』について」、『東北アジア研究』8:25-44。

〈モンゴル語文献〉

- Amar, A (comp. Z. Lonjid and O. Batsaikhan) 2015 (1934) *Mongolyn Tovch Tuukh*, Soyombo printing.
- Boldbaatar, J. 2016 *Amar Said: Nemej zasvarlasan khoyor dakh' khevlel*, Shinjilekh Ukhaany Akademi, Tüükh-Arkheologiin khüreeleen
- Boldbaatar, J (ed.) 2009 *XX zuuny Mongol Ulsyn Tuukhiin Sudalгаа, Tuukh Bichleg*, MUSI-n Tüükhiin Sudalgaanii Khüreeleen
- Boldbaatar, J. and Punsaldulam, B. 2009 “Tüükhiin sudalgaand garsan akhits, devshil”, In J. Boldbaatar (ed.), *XX zuuny Mongol Ulsyn Tüükhiin Sudalгаа, Tüükh Bichleg*, MUSI-n Tüükhiin Sudalgaanii Khüreeleen, pp.30-40.
- Bor, Jugderiin 2004 *Bilguun Diplomatch Chingis*, Admon
- Borolmaa, D. 2014 “Khüükhdiin Uran Zokhiolyn Ündeslegch”, *Khel Zokhiol Sudlal*, Tom VII (39) fasc.15, pp.138-145.

- Buyanemekh, S. 1929 *Baatar Khovguun Temujin*, Mongol Ardyn khuvisgalt Namyn Khevel, Chuluun (ed.) 2010 *Shinjilekh Ukhaany Tüükhiin Khüeelengiin Tüükhen Barimtyн Bürtgel 1*, Admon
- Chuluun, S. 2011 “Sudal bichigiin khüeelēn” in B.Enkhtuvshin, A.Ochir, and S. Chuluun (eds.) *Mongol Ulsyn Shinjilekh Ukhaany Akademi*, Admon, pp. 18-44.
- Damdinsüren, Ts. (tr.) 1957 (1947) *Mongolyn Nuuts Tovchoo*, Ulsyn Kheveleliin Gazar
- Damdinsüren, Ts. 1957 (1947) “Udirtgal”, In: Ts. Damdinsüren (tr.) *Mongolyn Nuuts Tovchoo*, Ulsyn Kheveleliin Gazar
- Ishdorj, Ts. 2002 “XIII-XIV zuuny Mongolyn Tüükhtiin Survalj ba Sudalgaany Zokhiol” In Ch. Dalai and Ts.Ishdorj (eds.) *Mongol Ulsyn Tüükh Ded Bot*, Mongol Ulsyn Shinjilekh Ukhaany Akademiin Tüükhiin Khüeelēn, pp.10-42.
- Jamsranjav, G. 1948 *Ardyn Unshikh Bichig*, Ulsyn Khevel
- Khureljantsan, J. 2004 *Ardehllyn khaluun ödriüid*, Kheveleliin üildver surgaltyn töv
- Khorloo, P., Luvsanvandan, S., Mönkh, Ts. and Tsend, D. 1968 *Mongolyn Orchin Ueiin Uran Zokhiolyn Tovch Tüükh (1922-1965)*, Shinjilekh Ukhaany Akademiin Khel Zokhiolyn Khreelen
- Natsagdorj, Sh. 1991 *Chingis khaany tsadig*, Ulsyn kheveleliin gazar
- Ochir, A. 1989 “Ömnök üg”, In A.Amar, *Mongolyn Tovch Tüükh*, Ulsyn kheveleliin gazar, pp.7-12.
- Pozdnyakov, N.N., Damdin-Surun, Ts. (tr.) 1941 *Chinggis Qaghanu üi-e-yin Monggol güren*, Ulsyn khevel
- Pürevdagva, Kh. 2004 *Chingis khaany menejmentiin tovchoon*, Mönkhiin üseg
- Pürevjav, S. 1978 *Mongol dakh' Sharin Shashiny Khurangui Tüükh*. Said naryн Zövlöliin Ulsyn Deed, Tusgai Dund, Teknik Mergejiliin Bolovsrolyn Khoroon Khevel
- Shimamura, Ipei 2012 *Chingis Khaan Khenii Baatar ve? :Mongol, Yapon, Khyatad, Evro-Amerik, Orosiin khaitсуulaltaas*, Admon
- Tsedev, D. and Ban Manduga (eds.) 2012-2015 *Sodnombaljiryn Buyanemekh ded bot' Khüürner zokhiol, Jüjig, Ulaanbaatar*.
- Tseren, Ts. 1990 “Onkhod Jam' yan Delüin Boldogiig khaisan n”, *Utga Zokhiol Sonin*, No. 34.
- Tüdev, L. 1971 *MAKhN-aas Utga Zokhiolyn Tukhaid Yavuulsan Bodlogo*, Mongolyn Zokhiogchdyn Khoroo
- Yan, B. Damdinsüren (tr.) , Dashdorj (tr.) , Dugersüren (tr.) , Luvsanbandan (tr.) , Natsagdorj (tr.) , Perenlee (tr.) , Rinchin (tr.) , Khorloo (tr.) , Tseeven (tr.) , I.Rinchin (ed.) 1950 *Chingis Khaan, Sükhbaatar neremjit ulsyn khevelekh üildver*.
- Zagdsüren, U. and Tsend, D. (eds.) 1967 *MAKhN-aas Urag utga zohiolyn talaar gargasan TOGTOOL SHIIDVERUUD (1921-1960)*, Shinjilekh Ukhaany Akademiin Khevel

〈ロシア語文献〉

- V.Ia. Vladimirtsov, 2002 *V.Ia. Vladimirtsov-Raboty po istorii i etnografii mongol'skikh narodov*, Institut Vostokovedeniia RAN, pp.304-30.
- Kozhevnikova, M.N. 2012 “Uchēnyi Sekretatar' Komiteta Nauk MHR M.N. Tuvianskii” In: S.Chuluun, T.N.Yusupova (eds.) *Mongol'sko-Rossiiskoe Nauchnoe Sotrudnichestvo: Ot Uchenogo komitera do Akademii nauk*, Admon, pp.64-80.

〈英語文献〉

- Atwood, Christopher. P. 2004 *Encyclopedia of Mongolia and the Mongol Empire*, New York: Facts On File
- 1994 “National Questions and National Answers in the Chinese Revolution, Or, How Do You Say Minzu in Mongolian?” *East Asian Working Paper Series on Language and Politics in Modern China* 5. Bloomington, pp.37-73.
- Campi, Alicia J. 2006 “ ‘Globalization’ s Impact on Mongolian Identity Issues and the Image of Chinggis Khan” In Henry G. Schwarz (ed.) *Mongolian Culture and Society in the Age of Globalization*. Studies on East Asia, Volume 26, Center for East Asian Studies, Western Washington University, pp.67-99.
- Kaplonski, Christopher 2005 “The Case of the Dissappearing Chinggis Khaan: Dismembering the Remembering” , *Ab Imperio*, 4: 147-173.
- Franke, Herbert 1994 “From Tribal chieftain to universal emperor and god : the legitimation of the Yuan dynasty” . In Herbert Franke (ed.) *China Under Mongol Rule*, Hampshire (UK) & Vermont (USA) : Variorum, pp.64-69.
- Nasan Bayar 2007 “On Chinggis Khan and being like a Buddha: A perspective on cultural conflation in contemporary Inner Mongolia” . In U.E. Bulag and H. Diemberger (eds.) *The Mongolia-Tibet interface: Opening new research terrains in Inner Asia*, Leiden: Brill, pp.197-221.
- National Statistical Office of Mongolia 2003 *Mongolian Population in XX century*, National Statistical Office of Mongolia.

## SUMMARY

In this paper, I explore how Mongols in Mongolia proper (Outer Mongolia) “esoterized”, or conceal their nationalist intension through an examination of the representation on Chinghis Khan in Early Socialist time in Mongolia (1921-1953).

Chinggis Khan has now been formalized as a resource of Mongolian nationalism: this was facilitated by what I call “printing socialism”. In other words, I argue that most people in Mongolia had actually forgotten Chinggis by the beginning of the 20th century because of a strong Buddhist influence. They only began to acquire knowledge of Chinggis due to the development of printing technology, and above all through the demonized image of him by Soviet writers and historians and writers. In this paper, I would like to show how Mongolian intellectuals tried to disseminate knowledges on Chinghis khan and his World Conquest, which might be major resources for constructing their nationalism, by translating demonized images written by Soviet writers like Yan and Poznyakov in 1930-1950. However, Mongolian intellectuals’ secret intension didn’t noticed by peoples, and their nationalism was miscarried in early socialist time.